

十二
福 壽

壽 慶 集 卷 六

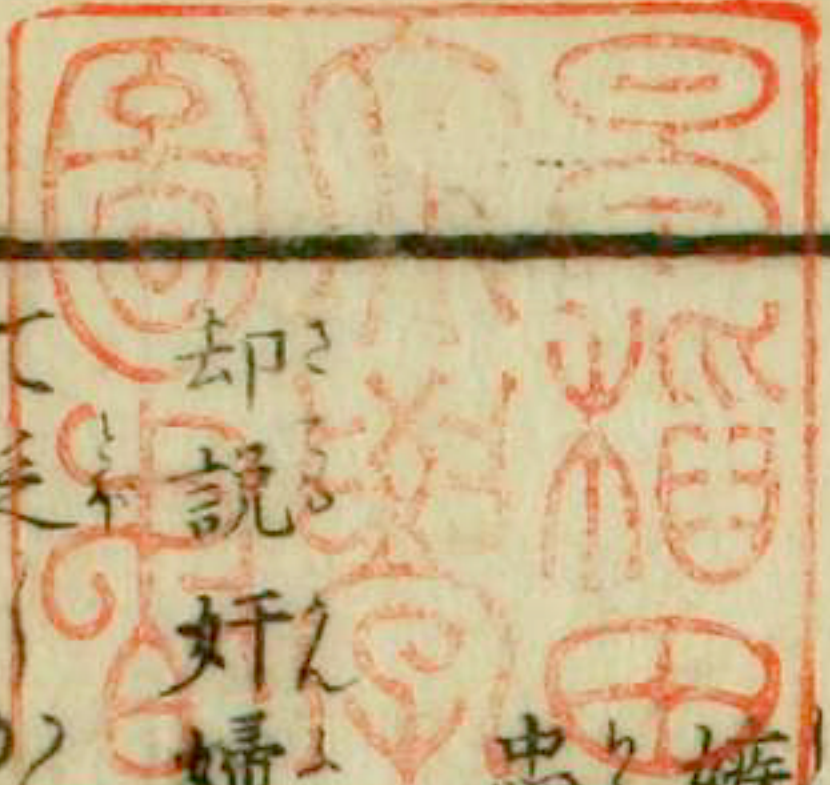
六

99
へ遠13
968
6止



明遠 13
號 968
卷 6

本清



繪本蕢草紙卷之六

嫉妬二女互爭夫
忠孝両雄再起名

却説奸婦梶子ハ浪花ノ有テ花園豆ト仮名ノ医ト業ト
て毛カハ樂モルニ不意モ小性弁之助ト殺害大坂ト逃
電ハ大津ニ歸リぬモトモ再ビ罪ト犯セ身ヲハ誓
俳徊ト憚リテリ小幸ハ北度左門翰屋ノ有ク何一不足
暮一ぬモバ梶子ニ子細ト語りテ我弟トシテ舎藏置ぬ
お中ハ実ノ弟ト心得テれば隔ナク養ヒリ梶子モお中

玉泉堂膽丸 戲編



左門の齋寐膠柱と見え嫉妬熱胸なれば折成得てお松とるなり
 おせんと思ひぬをバ忽ち一計と生トおしめし向くは此
 度石山の閑帳ヲ参詣し宇治の辺を二見せんと思ひぬれども
 此辺りの案内曾てあるは頼るハ兄妻道ちとて五つまでや
 一つ々々慰めおとさん然るくハ同道玉りさうしつふ
 もよ折るれば影散も然るく思へども男と同道せん夏左門の
 思ひんやをも影護く左右もも回答もゆるり実の兄弟な
 るハ疑りや中やハ有と只管にそめぬふ今ハ固辞かて
 左門小斯と告るに本巨ハ女の交るれば外エありとハ露
 おりいさへ同道とゆるしはバ即日人とも俱せ只兩人が
 石山に詣て夫より宇治へと心ざし獅子飛米くなど一覽し



都て此辺りの峻岨に之くもやハ峨峨とて岩壁屏風と立し如
 く弓手ハ名に湖水の流ま白浪もさう流もさう米とか
 らく似ればバ米くと名付し成べし然るに兩人此辺りと巡覽し
 梶子の心中小エける夏いさやぬお松を那辺那裏見回
 るど時分しと思ひしや梶子ハお松の脛とわさて谷へ落さん
 とすお流石お松も一癖けら女なれば倒ささぬり梶子の裾と
 ちり握るに踏止ぐれば悪路もさうが兩人等し谷に落て
 いさへ應合ぬお梶子ハ力やさうりん竟しお松と取てあさ
 腰刀と抜より早く胸膈とささし突し起もけりて苦しお松
 と足下に踏へりさうりさうりハやお松妻ハ良人と密通し傍
 若無人の尾籠とるせし報と思ひあさるし妻巨とハ仮の名



おして誠ハ左門が妻梶子といふ女あり妻と汝に見くらぬ
 尊憤ありひまをよとて或蹴或踏さるゆにお松ハ苦しい
 息の内ふと梶子と信と睨みていづく汝ハ左門乃妻とて更ハ
 今日まで知らざるものを欺し殺しにせられ恐死すの後は
 思ひあせん物とてそとへに言ふと耳もさけバ刀とりて咽喉
 のくさく成らんと刺りまは竟り息絶ゆるを木の葉をよせ軀を
 覆ひ木の根をカ小つてひ上り衣服の塵と打拵ひつらうして道を
 けしひさうげなれありらうして我家とさうく帰りらるに早夜も
 ハツ時と成ぬる小表の戸とやひくくおとろくハ左門起出づ誰か
 とて向り梶子なり子細ハ奥とて語らんふとて明てとていづり
 一人帰りといづらうあう其後と付く奥へ入て灯と照し見

し梶子が面鉢大小傷も左の腫裂く恰も柘榴のくせく如くありて
 痛忍がうとて彼香と出い薫るるに痛を忽ち止りぬれども
 庭ハ愈どしとてさうりの美婦はらうしり媿女と成てざり梶子い
 中う疾より妬しと思ふあや門と今日石山を奥あし斬らる
 らひいとて委しと語りられぬ左門心中にありあうつるま
 バ斯膽太き女あるまじやうなまじかして有るが某とてと憂
 目や見ん所全彼と捨る一人身成立んはあうとてやが何気
 かとありらあうとていり回答して其夜と過し翌早朝小密
 一室内に有合入黄金と懐し彼名香と取出しつ何國とて
 むく出失なり梶子ハ是を露あは起出に左門ハ見むひく
 かとわすね家内乃なるれが先急を名香の管と見り小香

ハあつて只空しく死管のそるもバ大り驚き怒り扱き左門妻
 が媿くわうしと忌て亡命せしと思つてつと速くハ行ト申のそ
 追付て恐ろそろろさんりのと表の方へけ出さうしあひるや
 昨日我手して殺しぬお松の姿目前に発頭し恐ろそろろ
 さんと思へど名香を徳しよりて夏成逐を今もそありひ知べし
 とつと形どに見へざふ梶子仰り撲地倒れよりして左乃手
 足をりれ如く腫太り面さへ斥面ハ恰も男子の如く片面ハ女子に
 して古今未曾有の形想とあり喰とる事々人々倍し身躰殊
 し健あして始より伎倆し一五一十と己と語り狂ひ歩行れ
 ハ乱心ろろろ追寄者一人もろろろれを住居せし家宅もろ
 ころ艸生て蝙蝠の拙とあり其身ハ野り伏し穢しる物も厭子

拾ひ食し町定め狂ひ歩行ぬ日頃の悪行めらり来り頼まれり
 疾病を生じ因果觀面の道理斯らとて夏なり恐ろろろ
 去程に春城友之助井関浦太良磯辺の三人ハ惣持寺と出立し燐火の
 行方とまろろ丹羽瓶割坂の辺り至るに道乃傍一人の乞食
 不覚小森ししと成見るに面目四肢に至るやろろ片身ハ男
 しし片身ハ女ろろバ人々怪しと世々希有の難病も有りゆふ
 とて立止り言事を聞か抑梶子十三歳の砌り船中を難く達
 し夏より左門と密通し十内と害し名香を以て方枝をまじひ
 大津におわろお松と殺し終ふ左門見離されて名香を失ひし
 夏までつとて落もなく詰ると三人ハ聞度毎に大に驚か又尋
 秘として梶子ろ夏とまろバ一度ハ悦び三人面を見合して只

呆まてて居るに磁辺熟くと見く面体変るとども称嚴院
 一未りー花園巨りるも似りとりつゝ梶子忽ち心附くや汝ハ
 女と見へれども正しく鹿園磁之丞あつとやと既ふ立からん
 とすゞ紙浦太良右の足とりて撲と蹴る小跟踏ると遠巡ると
 友之助捨つ先一人の敵し環會ぬとどされど此後一殺さんも之
 趣くそ有合繩とりて傍る樹木小相あさ或ハ片手と落し片
 足と切り或ハ刺刺おどるゝて竟ふ利り切殺ると忽ち塵
 空し物も声有てや嬉しやとて一の燐火何國ともるく飛去ぬ
 扱ハ今断が物語ーお松と中の霊魂かゝると猶腰刀を以て
 傍る松の木比皮と削去て準備の里計と取出し惣ての行状仔細
 一認め催馬急ぎ五十拙左門と尋移んと三人等しく立ちるす

一團の燐火忽然とわたり北とさうて行を見く扱ハつとど離の
 導とるれとて是と目當り三人ハ山とくしてどたど行ぬ既説
 五十拙左門ハ名香并に黄金と懐ちー大津と逐電ーわまもも
 兎し角世と思ふ罪人るれば何國り行て身と寄んとや丹波
 路さうて行小思ひかひも山中に日成暮し前後道と失ひ
 ていせんと企停り樹木の後より五人の盜賊前後の道を
 遮り路用も勿論衣類も脱て通る一丸もハ命も置り
 行べるとして五人等しく刃と抜て圍り小野全躲やどし思ひて
 忽ち五し疎蹠てつゝ某行先りて通る者るハ浪花に於て
 人とあやめ黄金と奪つて逐電せし者之願くハ本管某も小唾囉
 ころ加玉りれりころ加童の老るなりとて黄金五十枚を出



繪本新編巻六

小賊等申す是と接取とふ所存有り我等掣観して本管
 頼聞へん先杜騙のてとめ一功と立べし我ら今日強う
 盗賊と出さるるあつた此度首領養癰と発して命も危ふしこ
 ちハ浪花ノ花園豆とつる名医つらう今是と迎へん
 出行るり汝大坂ノ居し者もさぞ定て汝も知て有へし但し未
 つて其豆成さうし出せ夫と功し掣観せんとつらう左門輒然と
 打笑ひつとハ浪花ノ行追ふも及ばず其豆とつらうハ則某が妻
 是に付て小物語をゆれど其勿卒しハ咄しかう最其業其奇
 某も我又所持せり某と持し往し病即坐し愈しやさん
 猶其子細し浴途語り聞へんとつらう左あは疾来りしとて
 六人等しと道と早め山洞とつて立歸りぬ抑あの本管と

つらう元甲筋の浪人あつて力つと追はれし能知法し熟練し業
 小わらうて同役と殺害し終り園成去て盗賊の頭領とわらう
 丹波乃奥山ノ冊をわらう閻雲鬼三治と名乗て数多の小賊と随
 我意とわらうし年月をわらうし此度腫物と発し苦し
 とわらうと拐掣来りし女原小賊しと集合し介抱大方さうさう
 り折しも已前の小賊左門を伴ひ如此し名由言入るに鬼三治
 左門と枕辺り招きて足下今某が病を愈さんしと服薬を
 するや又外治してりやと問ふ左門答て服薬をしつた又外治
 てしゆしゆしゆ只某が掌とりて二三度撫ふにわらうし疾し
 変方しつたもあやうしつたも小賊小告て香炉と取よせ彼奇香
 と薫して手を以て覆ひ猶手して腫物成撫ふに随はぬ痛し

忽ち治へ腫散してこれハ鬼三治大い呪ハ衆賊を奇異の思ひ
とるし是よりして左門と山柵止あり酒肴飽やして美をほく
享くもこれハ食客とあり置り却記春城友之助井岡
浦太良高濱磯辺の三人を離れ霊魂乃ち手により丹波路へ趣
こめしむる傍り一人の獵人休息ぬると三人ハ北傍と通行し
磯辺ハ早くも此人と見ると思人の客人に侍りばやとつり
獵人驚きてこハ磯辺殿ありと各つる傍より友之助其許ハ先
年我寺母子恩を蒙り浪五良取るる磯辺にむすまひ知る人
かやとつりつる小磯辺のどくく善て良人ハ聞侍り度く
恩義の救ひ預りつる北國の客人とハ此主ふ侍りるれ君
とも又あらし召さしやと互に驚き友之助つる道路を路

踏して抑つる縁よりて教度罵憐り預り磯辺を思
澤又度くるつり聞ぬ頼るを姓名を明し我が安堵を得さ
せ玉つとつり獵人回答て事果されい迫ハかつ語るやと
思ひつとも斯めが會ぬる猶匿ひ於てハ身成高揮り似
しれバ今ハ身乃締とつりゆるも某ハ元浪花乃豪家真鹿屋の
嗣子るが放逸懶墮り身と持とる種る者悪行募りぬ
もど終の家宅と追放しれ尼ヶ寄の別業小押込らとぬれも
猶放蕩し行ひぬもバ末少を少し此貢どにおくハ真鹿屋
ハ町人かれども系團正の家ありバ攝品與村越後守正信の
の妻腹を男子と養ひ則磯辺との父松太夫殿ハ浪人ふして
去るも與村家の薄縁の人をれを真鹿屋へ行きて宝庫を預

了て有りしに某猶放蕩止まらば手廻の諸道具追賣代る詮す
 けに折う我に給仕せ度右衛門とつるりの四千両の金子と所
 持して我前より来りてつらう去迎ハ縹君より放蕩と止り
 真鹿屋の養子君ハ縹君事義理と失せば金子と送らんと
 願ひ玉と大君是と許し玉りどせん方かくて継家君ハ宝藏
 預りの松太夫と召し斯くせしもの仰と受松太夫又某と招き如
 此くんと備由と聞て有しを更し思へど養君の愛憐保
 子に義松太夫の忠臣かこりて今宵往てうかづふ
 約し違はず宝藏の戸半開き置て有しよりて忍び入て則此金
 奪取りし跡少く盗賊の某ハ相果る宝藏預りの番人松太夫
 ハ追放しつひる人去迎ハ継子の義心松太夫が忠臣教なる秘

ども某も身の慾るぬ盗賊も君と思ひ奉まらば此ハハ心で
 改め生涯身と立玉りれとつて其後切腹して相果ぬ武士も
 及ぬ忠義のつさめり某も先非と悔此金仇と遣らんや
 一と真鹿屋乃家長久彦右衛門の吊らひかづと思ひく
 流浪せる人と見まはせと救ひぬ況て由縁は其許夫婦付
 奈禮不及んや且先年三國峠に於て松太夫殿の危急と救ひ一人
 の小児と諾して其砌り磯辺殿の備由と聞き密に斯ハ計らひ
 めし物語る友之助掌と打てつて其砌り松太夫小妻らと
 一小児とつて則傍に在ぬ浦太良とてはとて夫よりして
 後乃一五十分仔細語り互に薄命成敷と又幸と悦びて暫
 らく時と移りし斯て有べき更る糸ハ浪五良八人を伴ひ



會大寶堂氏卷六

十一



源之助

つとむ

客つる方ふいさるひて木寮小庵と借て暫く日を重祓敵討の商議
 とらうぬるに旅客のなほひとてさうある筈不元結紙筆葉
 の類と貯へ旅客の商人老母のうらう今宵友之助の
 て菓ともめ四表八表の咄しわざするに偶と磯辺と見こハ美
 し紅女うれ如何かして厮と伴ひるに空蔓るる心よ
 うあづさ先咄しに交へ尋ねるハとも客人をいづも何方
 へ行せ平ふといつり浪五良ことと戯ま忻ていつく我ハ
 和易の者るを見らる如く三人の兄弟婉容ハ衆人ハ勝もてり
 へどいつる罪乃報ひく十年前一月の間三人とも支離と
 なるぬ一人の男子ハ咄とたりて一言も吐まけり比次るる妹ハ膝
 行とらうて寸席も歩む難し弟ある者ら聲とたりて雷

のころろが聞へど医師と頼と羽入下願て百折千磨をれど
 少く此功どにわづれが今ハ浮世とあさるる思ひく二人を將
 て順禮し扱ふと爰に客のりつと假哭して語るに老婆是を實
 と心得る類希るる薄命親爺の宿縁の死より成り
 と痛やうくどんとゆるれ爰ふつ乃幸ひあり此頃此山中に一人の
 名医わけて何等難病のりとも名香と薫る一掌を以換る小忽
 平愈と此医師願ひる三人とも疾病速り治らん夏掌を
 返とが如し是を將て行りらん心の中におりる朝
 せも戲言が便着と成る今聞得る名香を以ての医療粗思ひ當
 事らとバ浪五良が禮と述べてさうく幸れ老婆小巡り合
 りのり尤準備もり何卒其医師と頼と玉れといつる老婆又

つづく此医師のちがりに謝義と求ふはつゞけに定る妻なるは美
婦と求ふ折るり此息女いと美麗なれば病治して侍らば其医師へ嫁せ
しり玉りれ左あつた三人とも頼みて病疾不愈し奉るせんと言ひ
浪五良も北の方より頼み所を先病者と將て行りしりて業内
玉りこと既に準備せんとするは成老婆頭と左右に打つて此医
師子細あつて衆人に逢まといひぬ先息女一人妻不奉給ゆ
と聞き浪五良大に怒りて此廻何とつ支離るるも某が愛子
なり何きに將て行りしり憂と見せんとすやと教團に廻を
又怒と含めて催馬医療も止めぬ生涯支離るを樂するめ嗚
呼縁る死衆生ハ度しがるるはさかたて立んとするに友之助
其意と得て老婆を引止めあつるに我真とあつて又廻と指さ

て將て行玉りれりのさぬ見せしに磯辺又是と曉得て忙しく
膝行寄て掌合せ老婆公怒りと止めて妾等を伴ひ玉りし
只管小頼わに浦太良ハ其意と得ざるさぬて恍惚として
居しに廻ハ是と計策とあつて左のバ妻やが醫師に此備由
と語て翌日又来りぬしに浪五良又詞と改め只管小頼
めをバ心と得侍ることと老婆ハ其夜退出る扱も四人の人互に
面と對し笑を忍び居しりる浪五良つづく此頃の憂
老婆と忻樂んと若く頃学び狂言の三人支離とすのひい
戲言の幸しりて今物語に醫師とすハ是全く五十拙左門
る変必せりつれもして仕課せしやと喜び勇ひ磯辺声と低
うして妾はう彼名香と親覺侍と先立て事と正し侍らん

注目せば急ぎと拈ゆり〜と猶密に商議しぬ却説翌日ふも
 成ぬ色バ彼姫疾へ来りて昨日医師ふ得と頼ゆるふ伴ひ来るとの
 夏より侍もバ急ぎ用意せられよか〜それと人ふい玄関に扣られ
 病者一人宛廳へ入る由るれど其準備も未られゆ〜のざ茶内
 侍〜んとつふ人ふ大り喜び先磯辺を浪五良の脊に負ひ
 兩人是に随ひ老女の後ふつ〜と山中凡二十町も歩む〜一個乃大
 家ありし高塚或ハ門の構恰も高家を館の如くするに姫は
 門へ入る人ふ玄関に待せぬと其身ハ小る門扉と開れ内へ
 暫して玄関に出来りつ先藤行乃息女あり〜来りゆ〜とつ〜
 畏る侍ども速〜と参り〜侍に老婆公介抱玉〜
 とて藤行寄と老婆是と扶掖〜窺〜と聽〜つごわひ行ぬ

残る三人ゆいせん〜と私言ぬるに友之助さ〜足〜忍行〜襦袢
 こと〜明〜と幸と〜視〜小繡〜袴と数箇重彩〜胡坐〜
 傍に朱の蔭繪〜香机〜青磁の香炉を置ぬ磯辺と其前不卧
 ぬ老婆ハ傍り侍坐せり醫師一器の蓋と取退奇香と少〜出〜
 て香炉小投〜に香氣馥郁〜と鼻と〜つ〜醫師掌とりて
 是小覆ひ静〜磯辺の腰乃辺と撫んとす〜公磯辺其手をひくと
 〜〜〜出合〜と言と等〜〜窺待〜友之助恃〜と入〜先医師と
 拈ゆ〜小老婆ハ周章〜け出〜と一間〜和〜浦太良忽ち足下に
 引寄〜て高手小手〜拈ゆ〜此物音〜三人も小賊駈来り〜太
 驚〜さ良人と樋の口婆ハ拈ゆ〜れ五〜と木管〜此由告〜と逸
 足出〜と〜け出〜と浪五良得〜と〜三人〜に討課〜ぬ



新編海防新書

叔真入るゝ醫師不向ひ四人等一とていふ五十括左門斯と
 我ハ徐ガ為リ殺害せられ春城出羽之助ガ躬同苗友之助井関之内
 一子浦太良沖津ガ妹磯辺より疾白状して罪ヲ謝せよといふ醫師
 猶陳してとて我ハ是醫師より人と殺害せしおぼへ更に
 そハ人違ひるべしといふ磯辺乃とていふ汝ガ所持せし名香とい
 つつ赤松家の重宝延壽香とて夏妻より是と志せりといふ
 友之助とていふ汝の妻とせし梶子ハ花園直と仮名浪花在
 又大津小歸リ汝彼で見捨てより飛割坂あり梶子速し首状
 せしとて既ニ殺害しぬかゝ露頭及上を陳ふといふも
 争う陳し得ん中といふ左門今と言きて只罪と謝しあつと四人
 等しく刀と被持中が友之助觀念せしとて一臂を落とされ磯辺浦

太良も思ひく可るゝが切付し竟し首と討落ると友之助
 急ご名香の箱と取得し幾重も包こ是と首にけ天を拜
 して喜躍り友之助猶老婆を見て汝々是樋の口婆と呼らす惡
 婆今小賊のつとて知まり先年三國峠小むつて標児の灯笼
 て沖津主役と賊手に渡せし鳥人今思ひあふとて拳と以て
 面鉢成さつと打し鼻孔より血流まゝ救し玉と號哭し
 浪五良あまを制しり小老婆其山賊の接洞といつと程速し
 汝那里と案内で命ハ助得さんとつとて有難さ
 御慈悲るれいで案内し侍さんとて縄付ぬし先立小四人
 其後辺り廻ひ十余町も行しとおぼつたり又一個の茅舎有
 て山賊の本管鬼三治の接洞ととおぼつたり先樋比口婆を門

前まへに撃つぎ置おけ四人等よにんらうしつゝ内うちへ入いて見みるに今いまや酒さけ宴うたげの跡あとと見みて
悪あく穢せなる酒さけ肴さかな散ちれ中なかに鬼おに三さん治ぢ抑おさへ寐ねる高たか軒のきして有ある
ハハハハハハ笑わらむくして埒らちとせんとも衆しゆかり相あひ上あるに鬼おに三さん治ぢ天てん小せう驚おどり
あぐあぐ自由じゆうなならば呆あはれ着きて言いふは此こ物もの音ねの酔よ伏ふせ
小せう賊ぞくども周しゆう章ぢやうふふめためたたと浪なみ五ご良らう追お馳ち追お詰じつ
切き捨すもバ震ふる標めく女め共どもと呼よぶは徐じゆ等らうハ是こ何なに者ものと問とふ
撃つされる由よしと述のふは悉しつく送おくり返かへるは言い怖おそ事こととれと
割わく四人等よにんらう鬼おに三さん治ぢ前まへに至いたり磯いそ辺へのはららとは妻つまハ是こ先まへ
羊やう徐じゆが為ために命いのちと失うはれる沖おき津つの妹いもうと磯いそ辺へのはららとは姉あねの敵たふ観かん念ねんせよ
と首くび宙ちゆうに討うち落おつは前まへに至いたり浪なみ五ご良らう被お婆はふはひひ釣つの如ごと
く徐じゆ一人ひとり勤ごんんんもも同どう類るいありる先まへへ行いぬは汝なんも道みちに渡わたる

その内地獄うちぢやくへ行い中ちゆうに言いふは竹たけ割わりも切き捨すりは扱あつは扱あつは
れは女め共どもと將まさるは衛ゑい門もんには至いたり訴うげとは敵たふ討うちの行い状じやう上じやう
る小せう縣けんも御ご聞もん届とどりて殊ことハ山やま賊ぞくと退たい治ぢせは段だん御ご褒ほう賞じやうの
アアも本ほん國こくハ使し者しや以もつは通とじは且かつ扱あつはされる女め々々
そそも贈くわり遣はつは間ま止と置おけはああて事こと濟すぬはバ即す刻く夜や
と日ひ小せうつつらら惣そう持ぢ寺ぢに立た帰かへり松まつ太た夫ふと對たい面めん一いつ五ご十じゆうと仔こ
細こく語ごり首くび尾び克く敵たふと討うち課かせは祝いわい浪なみ五ご良らう松まつ太た夫ふも再さい會かいと
悦えび皆みな打う連れん安あ治ぢ川がわより便べん船せん播は磨らへは出い帆はんしは却かへ説せ
五人ごにんの男おとこ女め播は磨ら小せう着ぢやく岸がし急いそぎ真ま部ぶ志し津つ六ろく行いく敵たふ首くび
尾びよよ討うち課かせ相あ公こうの御ご秘ひ藏ざう乃のみ名な香かうと取と返かへせは由よし述のふは
志し津つ六ろく大だい悦えび人ひとと賞あつは翌あ日にち繪え寫しや菅すげ右みぎ衛ゑい門もんに付つく城ぢやう

繪本實業氏巻六

主赤松政則公へ聞へ上めく小室修らる取帰りしと御廢美の
 了く友之助ハ助命戎蒙るのこゝろ再び春城と名無き世
 本領安堵仰付れ浦太良も又よりり家系るれはして井関の
 家とおこさせ是又初乃如く扶持せられ諸士此中に加へてりれ
 ハ友之助ハ願ひ上磯辺と妻よりれ松太夫浪五良兩人ハ攝品
 祿嚴院へ行近辺より艸庵とひとびろ過去一人の追善を
 為小とて剃髪し佛道し帰依しりり扱又下の関し残せし禿
 舟路ハいよと遊妓も身と汚されを贖ひ出して浦太良の妻
 とり浦太良を井関十内と改め忠勤おこりりり春城井関
 の両家目出度家富こころりり
 繪本蕒草紙卷之六 大尾

文化十二年乙亥九月發兌

書林

皇都

浪華

伏見屋半三郎

鉛屋安兵衛

安田屋吉兵衛

藤屋徳兵衛

